

個別企業の決算動向に注目集まる

2009年7月24日（金）

第一生命経済研究所 経済調査部
副主任エコノミスト 人見 小奈恵

TEL 03-5221-4523

e-mail: hitomis@dlri.dai-ichi-life.co.jp

米住宅市場底打ち期待が相場を押し上げる

米国株式市場は大幅高となり、NYダウは9000ドル台を回復して年初来高値更新、ナスダックは17年ぶりに12日続伸となりました。化学大手や通信大手などの市場予想を上回る好決算や米中古住宅販売件数が好感されて全面高の展開でした。一方、債券市場では、米財務省が発表した来週実施予定の国債入札額が総額1150億ドルと過去最大規模となり、需給悪化懸念から大幅に下落しました。

6月の米中古住宅販売件数は前月比+3.6%増の489万戸と3ヶ月連続で増加、市場予想（484万戸）も上回りました。1月の底（449万戸）から+8.9%増と昨年10月以来の水準まで回復したことから、住宅市場の底打ちの兆しが市場心理を明るくさせました。一方、米週間失業保険申請は、55.4万件と市場予想（55.7万件）は下回ったものの、前週（52.4万件）より増加しました。ただし、約1ヶ月前の水準（63.0万件）からは減少傾向にあり、第3四半期には回復するとの見方が出ています。欧州市場でも好調な指標が発表されました。6月英小売売上高が前月比+1.2%と市場予想（0.3%）を大幅に上回り、欧州株式市場は9日続伸となっています。

日中は好決算銘柄が好感されましたが、引け後に発表された第2四半期の企業決算の中には厳しいものが出ています。ソフトウェア大手はPC市場の不振やネット上の広告収入減少などから、前年同期比で▲17%減収、純利益は▲29%の減益。クレジット・カード大手も人員削減コストが収益を圧迫したほか、カード関連の不良債権額も増加し、前年同期比で▲18%減収、純利益は▲48%の減益でした。いずれも市場予想を下回り、時間外取引で大幅安となっています。

電気機器が相場上昇を牽引

国内市場では、欧米株高を受けて大幅高で始まりました。海外市場での円安や商品高を受けて輸出関連や資源関連株中心に堅調でした。しかし、後場は先物主導の展開でした。後場寄り後は上げ幅を急速に縮める局面がありましたが、14時以降は下げた分を買い戻されて、そのまま引けました。日経平均株価は8日続伸し、10,000円乗せまであと50円強の水準まで上昇しましたが、米株上昇の勢いと比べると買いの勢いは限定的でした。週末要因による伸び悩みに加え、米引け後に発表された米企業決算への失望感から米株先物および米ドルが軟調で、朝方1ドル=95円台前半で推移していたドル円相場は94円台後半へ突入し、株式相場の上値を抑えました。業種別で相場上昇に最も寄与したのは電気機器でした。半導体装置大手の4-6月の受注高が1-3月期と比べて約2倍となり、100億円を超える見通しと報じられたことが好感されました。韓国でも半導体大手が第2四半期の好決算を発表して株価は堅調でした。半導体部品価格の上昇や携帯電話や薄型テレビの売上増により、前年同期比で売上は+16%増、純利益は+5.2%増でした。アジア株式市場は全般的に上昇しましたが、韓国では4-6月期GDPが前期比+2.3%増と、2003年10-12月期（+2.6%）以来の高成長となり、アジア市場にとっては明るい材料となりました。

市場予想を上回る米企業の好決算が世界の株式市場に安心感を与えています。利益水準は非常に低い水準にあるものの、悲観的な企業業績への見方が和らぎつつあります。日本でも来週から四半期決算が本格化しますが、この流れに乗って、厳しい経済状況下でどれだけ利益を回復させられるかが最大の注目点です。

以上